

東広島キャンパスの自然環境 —発見の小径—

フィールド科学系部門 生物科学班
塩路 恒生

1. はじめに

東広島キャンパスのアカデミック地区には、山中谷川から角脇調整池の間を小川が流れています。その小川の周辺には、大学が移転する前からの自然環境が残されており、多くの絶滅危惧種を含む多様な動植物が生息しています。この自然環境は、これまで大学の教職員や学生などによって親しまれてきましたが、2008年4月に、広島大学総合博物館によって自然散策道「発見の小径」として整備されました。技術センターにおいては、フィールド科学系部門生物科学班を中心に当初から「発見の小径」の整備・発展に協力しています。また、散策道に設置しているバードウォーク・ベンチ等は、工作部門によって製作されたものです。また、秋の大学祭のビオトープ企画や総合博物館のフィールドナビにおいて、各部門のメンバーが活動しています。

イモリ、マメゲンゴロウ、オオコオイムシなどの水生生物を見ることができます。また、ビオトープの東斜面には、アカマツ林が広がっており、定期的な下草刈りが行われています。樹林下では、ササユリやキキョウなどの里山の花が咲きます。



アカマツ林

2. 自然散策道「発見の小径」

発見の小径は、「ふれあいビオトープゾーン」、「ぶどう池ゾーン」、「溪流と湿地ゾーン(生態実験園)」の3つのゾーンからできています。散策道に特に決まったルートはありません。気軽に散策してください。総合博物館では、発見の小径の散策マップを配布しています。

(1) ふれあいビオトープ

工学部講義棟西側の松林と角脇川に囲まれた地域には、自然の湧水がある湿地帯があります。大学移転当初は、工学部によりハナショウブ園として利用されていましたが、ハナショウブ園としての維持管理が大変なこと、また多くの貴重な動植物が生息する環境であることから、自然観察及び体験学習を目的としたビオトープとして再度整備しました。ビオトープでは、“日本最少のトンボ”ハッチョウトンボやアカハラ



ビオトープ

(2) ぶどう池

ぶどう池周辺は、大学移転前には、広いぶどう畑が広がっており、畑に水を供給するための池として、利用されていました。現在、このため池は冬になると

ヨシガモ、ヒドリガモ、コガモ、オオバンなど多くの水鳥が飛来し、愛鳥家の目を楽しませています。また、池の中にはヒメタヌキモ、ヒツジグサ、ジュンサイなどの水草が生育しています。



ぶどう池

体験が行われています。初夏になると小川には少数ではありますがゲンジボタルが飛び、水辺では西条盆地特有の植物サイジョウコウホネの花を見ることができます。また 2 月になりニホンアカガエルが卵を産み始めると、少しずつ生態実験園も春に近づきます。



水田



バードウォールとベンチ



山中谷川

(3) 溪流と湿地(生態実験園)

このエリアは、もともと理学部移転後、理学部植物管理室において里山的管理を目的として西条盆地から姿を消しつつある里山の原風景の復元と里山の生物の保護をする試みがなされてきました。発見の小径の整備によって、他のゾーンとつながりができ、植物観察の場として学内外から多くの人々が訪れるようになりました。生態実験園には 330 種の自生種を含む 440 種の植物が生育しており、東広島近郊の大半の植物をここで観察することができます。また、復元された水田では、毎年附属幼稚園の園児による稲作

3. おわりに

みなさんは、ががら山に登ったことはありますか？山中池のほとりにたたずんだことはありますか？東広島キャンパスには、まだまだ素晴らしい自然があります。ががら山には 30 分程度で登れます。頂上からは西条の街並みや東広島キャンパスが木の間から見渡せ、風によって農場の牛たちの声も聞こえてきます。早朝の山中池は、朝霧が立ち込め、なんとも幻想的な風景になります。私たち技術職員はこれら大学内の自然環境の維持・活用に手助けをしています。